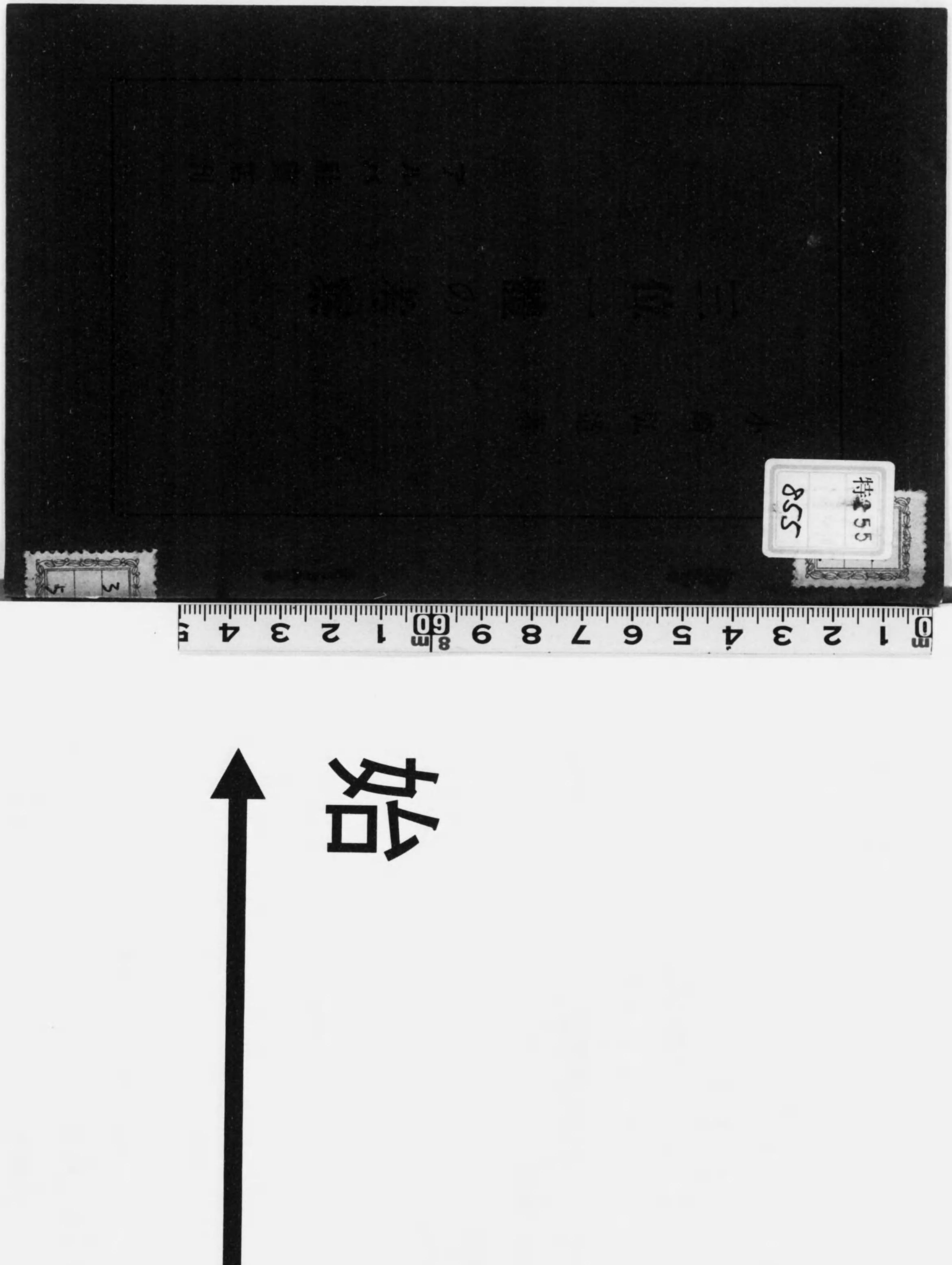
特2 55
858
40

855

小崎弘道著

三位一體の考察

アルパ社書店刊

特255
855

小崎弘道著

三位一體の考察

發兌 アルパ社書店

はしがき

『三位一體の考察』は、往年、同志社神學生のためになしたる講演の一部である。本編はさきに『基督論』の附錄として世に公にしたものであるが、捨てがたき研究なりしか、切なる教友の勸めにより、このたび訂正して再版に附した。

片々たる此考察が、幾分にても重要なる問題を闡明するの栞ともなりなば、著者にとりて望外の光榮である。

昭和九年一月

著者

三位一體の考察

小崎弘道著

使徒パウロは、基督教の教理の深邃なるを論じ、絶叫して言つた、『其教の奥義の大なること更に疑ふところなし』と。我らが基督教の眞理を詳かに理會せんと企るに於て、パウロの言語の眞に然るを覺ゆるのである。凡そ眞理は、科學にまれ、宗教にまれ、之を詳かに理會することは、到底、容易の業ではない。我々は太平洋の海岸に立ちて其前面を觀望すると、其近傍には汽船の黑煙天に横はるを觀る。白帆の片々として宛ながら水鳥の波に浮べるが如きを觀る。しかも其前面を見渡せば、茫々として水天相接するを觀るのである。我らが眞理に對する感覺これに異ならない。我々は眞理の幾分は了解することが出來る。けれども其全體を知ることは出來ない。こは宛かも太洋を望むが如き感なきを得ない。

殊に基督教の教理の多くは奥義の性質を有するものであるからして、一として詳かに之を理會し得るものはない。特に三位一體の教理の如きに至つては、此奥義の最大なものであるから、充分に之を理會することの出來ないのは勿論である。嘗てアタナシアスと同時代に在つた、ポイテールスの監督ヒラリーは、三位一體の教理を論じて次の如く言つた。

『これは人類の言語の範圍の外に屬するものである。五官の達し得ない奥義である。理性を以て理會する事柄の上に超越する眞理であつて、天使も之を理會することは出來ない。天使の主も亦之を理會することは出來ない。然も萬世之を窺ふことを得ず、預言者も之を發見し得ず、使徒たちも之を詮索し得ず、神の子御自身も之を明白に世に示さなかつた奥義である』と。實に此言の當るを知るのである。然れば斯の如き教理を窺ふには、單に理性の作用を必要とするばかりでなく、又た信仰のはたらきをも必要とするのである。

世人は三位一體の教理について躓く場合が多い。それは此教理が明瞭でないことに基づくのである。其深邃なる奥義を悉く理會することが出來ないからである。吾人は理性を有する。故にこれらの教理を理智的に了解せんと欲するのは當然であるけれども、斯の如き

教を悉く理會せんと望むのは、殆ど徒勞と言はなければならぬ。吾人は科學に於ても了解することの出來ない點が少くない。けれども科學を棄つることをせない。日常の人事に於ても信仰と推測のみを以て之を行ふことが多い。然るに人は宗教に對してのみ、之を悉く了解せなければ信じないと言ふ。之は大なる錯誤ではあるまいか。我々は兎角、極端に走る傾向がある。是は人の通弊である。我々は懷疑に陷ることをせずば迷信に流れるのであつて、迷信に流るることをせざれは懷疑に陷ることを免かれない。玆に於てか三位一體說を數學の命題の如く、明瞭に解せんとする神學者出で、またこの教理を否定せんとする神學者を生ずるに至るのである。共に極端に失すと言はなければならぬ。

次ぎに世人はこの教理を受容るゝに大なる困難を感じてをる。それは此教理に對する誤謬である。明治十二年の頃とおぼし、東京帝國大學の教授らは、屢次、基督教攻擊の演說をなしたことがある。其當時、教授矢田部良吉氏は、基督教の淺薄取るに足らざるを論じ三位一體說に說き及び、基督信者は 3=1 といふ、斯樣なる最も馬鹿らしき教理を信ずるものであると言つた。矢田部氏の議論は大いに誤つてをる。基督教がもし斯樣に法外なる

ことを教ふる宗教であるならば、誰も之を信ずるものはない。基督教は嘗て矢田部氏の説くやうな法外な教理を教へたことはない。基督教では一の神に三の人格(ペルソナ)あることは教ゆるも、一の神が、三つの神に同じとは教へない。

三位一體の教理史を見ると、常に一つの極端なる説あるを覺える。一方には、父と子と聖靈なる三の區別をもつて、神の三樣の示現に止むるサイベリアス流の説あるかと思へば、他方には、殆ど三神一體なる三神説あるを見るのである。然し是らは孰れも極端に走る誤謬説と言はなければならぬ。三神一體説は、決して三神説ではない。歴史を按ずるに三位一體説は、使徒信經において其萠芽を顯はし、ニカヤ信條において其れの大なる發送を見てゐるのである。使徒信經は、『父と子と聖靈の名に入れて弟子とし』(マタイ傳二八・一九)と云ふ、基督の最後の遺訓を、少しく擴充したるに過ぎない。然もニカヤ信條に於ては、此教理を哲學的神學的の言辭をもつて、最も明白に、最も嚴重に告白してゐるのである。ニカヤ信條は、正統派の基督教會が、之に依つて異端を防ぐ城壁となしたのであるけれども、其語勢は頗る穩當を缺くの嫌ひなきを得ない。ドイツの神學者ニッチは、之に關して

左の如く言つた、『教會が普通に受容るる此教理は、量るべからざる富を現はすにも係らず屢次、哲學的の思想を有するものに滿足ならざる解釋を出すことあるを免れない。例へばアタネシアスの信條の如きは、之を説明することが不必要たほど苛酷であつて、疑惑または難問を誘引するのである。然れば教會史の種々色々異にせる行路において、斯の如き難問が常にその表面に出現し、また跳躍することあるを見て驚かない』と。

以後この教理の發達について力を盡したのは、有名なるアウガスチンであつた。彼は父と子と聖靈の三者の區別を明かにすることに於ては其の功勞少くなかつた。然しながら之がために後世、三神説の傾向を生じたのは決して喜ぶべきでない。我らは是より眼を轉じ一言もつて聖書中の三位一體説を講究してみる。聖書は神學の書でない。故に聖書において果して三位一體の實體的の眞理を知ることができるか甚だ疑はざるを得ない。けれども三位一體に關する現象的の眞理については之を見ること難くはあるまい。

舊約書の解釋者は言ふ、『エロヒム』と云ふ希伯來語の神は複數であつて、其動詞の單數であるのは、三位一體の神であるが故だと。又た『我らに象(かたち)りて、我らの象(かたち)の如く、我ら

人を造り』云々の語の如きも、神自身に複數を用ひ給ふてをるから、之を以て觀るも、三一の神なるを證するに足るとなすのである。又た

我主よ請ふ、僕の家に臨み、足を灌ひて宿り、夙に起きて途に滿征たまへ。彼ら言ふ、否、我らは街衢に宿らん。（創世記一九・二）

神の靈をこれに充して智慧と了知と、諸の類の工に長しめ。（出埃及記三一・三）

エホバわが主にのまふ、我なんぢの仇をなんぢの承足とするまでは、わが右に坐すべし。（詩篇一一〇・一）

の句を以て、此教理を證する者もあるが、果して其當を得たるや甚だ疑はしい。特に複數の神及び代名詞の如き、これが三一の神を意味するや否や甚だ疑はしい。若し然りとせば、舊約聖書は多神教若くは三神教を教ふる嫌ひなきを得ない。けれども新約聖書に至つては、その書翰の部に於ても、傳記の部に於ても、三位一體の教理の萠芽となすべき證左少くない。予は一々玆にその章句を擧げて說明しないけれど、パウロの祝福の言卽ち『願くは主耶蘇基督の恩寵と、神の愛と、聖靈の交際なんぢら衆と偕に在らんことをアメン』

（コリント後書一三・一四）と、耶蘇最後の遺言、『汝らゆきて萬國の民にバプテスマを施こし、之を父と子と聖靈の名に入れて弟子とし』（マタイ傳二八・一九）の如きは、最も三位一體の事實を明瞭に證明するものと言ふことが出來る。基督の神性は、四福音書及び書翰のうちの句にて證明できるのであつて、之を詳說することは頗る必要でありはするが、之は他日に讓ることとする。基督の弟子たちは、基督を、父なる神と同樣に禮拜すべきものとなした。基督もまた御自身が、神と等しき尊敬を受くる足るものであると證明したまふたのであつた。是に因るも、基督に神性のあることは確く證明さるべしと信ずる。（マタイ傳二八・一七—一八。ルカ傳二四・五二。ヨハネ傳二〇・二八。ロマ書九・五。テモテ前書二・三。ヘブル書一・八—九參照）

扨是らの聖書の語は、三位一體の實體的の眞理を證明するものであるか、又は神の示現である現象を言現はしたまでに止まるものであるか、頗る判斷に苦むのである。然し思想の統一を保ち、またその複雜なる難問より避くる點よりすれば、現象的の三位一體說に止まるを可とするかも知らない。けれども吾らは單に現象のみをもつて滿足すべきでなく、

既に神の示現にして三位一體でありとするならば、其實體の本質に於ても亦た三位一體であることを承認せなければならぬことになる。然れば勢ひ實體的の三位一體說に言及せざるを得なくなる。

天地間の萬物を通觀するに、其高尙なる被造物ほど、その形狀の複雜なることを知り得るのである。鑛物は最も下等なる物體であるから、その組織は甚だ單純である、植物に至りては鑛物よりも高等なる物質であるから、其包含する元素も二三に止まらず、その組織もまた甚だ複雜である。更に動物に至れば、植物に比して一層高等である。故に成立の分子もまた植物より複雜である。然も動物においては植物に見ざる一層高等なる力、卽ち本能と稱する一種の能力がこれに加はつて居るのである。而して人間を見るに至りては、他に比類なき靈魂を所有してゐるのである。其の組織の複雜にして異樣なる他に比すべきものもない。然れば人を造りし神は更に高等にして、その形狀または性質の複雜異樣なるは毫も怪むに足らない。人に肉體と靈魂と精神(スピリット)あり、また智情意ありとせば、神にしても父と、子と、聖靈の三位ある、必ずしも信ずべからずと言ふことは出來ない。

スコットス・エリヂナ、始めて智、情、意の三をもつて三位一體を解說せんと試みたる以來、この解說法は中古學校派（スクールメン）の間に最も廣く行はるゝに至つたのである。人性をもつて神性を說明すべく試みるのは、到底適當といふことは出來ない。けれども人性の下等動物よりも複雜なるを見、類を推して神性の複雜なるに及ぼすは、決して不當の論法とは言はれない。予は三位一體論において徒らに例證を引き、比喩を並べて、牽强附會をなし、この困難なる問題を說明し去らんとする神學者の論法に服することは出來ない。

近世神學者の唱ふる三位一體論において、予の最も心を得たるものが二つある。其一は神の意識を根柢となすものであつて、其二は神の愛を根本とするものである。第一に就ては博士ニッチが言つた『若し神を以て第一の本我となさば、之より客觀的なる本我を生ずるも、この主觀的の本我と、客觀的の本我は、第一本元の中保を透して、第三の本我、神の本體より出でずば、尙ほ別々のものであつて、合致することを得ない』と。

デンマークの有名なる神學者マルテンセンも、略々之と同樣の說をなして次の如く言つ

た、「本元の三位一體の觀念は、神の性質の觀念と同一である。故に本元の三位一體の實體的の理會を持つことは、即ち神の有心的の生活の根本と、それに必要なる形狀の理會を有することになるのである。神の本元に關する此理會なくば、神の有心的なると、神が自己の意識を有するものであると云ふことを理會することは出來ない。古今エリアン派の神學者が、神の三位一體說を否定し、而して尙ほ神は有心的の神たるを得べくとなし、且つ自己の意識と意思を有する父なる神を表示することを得ば、之にて神の有心的なることを充分に保存しうるとなすは僞なり。神が若し永遠より自らを、子たる自らより區別し、而して靈の一致において、子と永遠に一つであるとするのでなくば、神が永遠より父として自らの意識を有し得ることを、何うして想像できるであらう。そして之を何うして考ふることが出來るであらう。神は永遠に自らをして己れの客觀となすものと理會することをなさずして、何うして永遠なる自己の意識を有すとなすことが出來るであらう。我らが意識を得るのは、我らの外界に萬物があつて、此の萬物が我らの本我に對するからである。意識の起るには、主觀あり、客觀ありて、又之に通ずる思想がなくてはならぬ。理性を有する

我ら人類にしても、我らの外に事物があつて、其意識を全ふするのである。要するに我らの意識は相對的のものである。我々は我々以外に萬物と靈物とがあるに由りて其意識は全ふさるゝのである。然しながら神に在りては絕對獨立である。神に在りては外物を待つことなくして其意識を起こすのである。天地未だ成らず、萬物未だ創造されざる以前よりして神は絕對獨立である。然らば何故神は外物を待たずして自己を意識したかと云ふに、神御自身に於ては意識の根源が存してゐたから、意識が起つたのである。神には第一、第二第三の本我がある。此處で神には意識が生じるのである。」云々。此說を以て三位一體の奧義を悉く解することは出來ないけれど、是にも幾分の眞理は含んで居る。

次には愛をもつて三位一體の敎理を說明せんとするものである。第一に之を試みた人はセント、ヴイクトルのリチヤルド（一一七三年死す）であつた。彼は言つた、「神は愛である。而して此愛をうくるもの最も價値あらずば、高尙の愛とならない。神は唯神のみを愛し得るのである。然れば單一の神にては此愛を顯はすことは出來ない。是れ第二の神子の存在する所以である」と。彼は又第三位の聖靈の存在に說き及ぼして曰く、「愛は自ら第三

者に通ずることを切望するのである。是れ第三位の聖靈の存在する所以である』と。近世に至り、愛をもつて三位一體の説明を試みたるものに、リーヴネル、サルトリユース、デリツチ、ドルネル等がある。是らの人々の説明は、孰れもリツチヤルドと趣きを同ふしてをる。

神は愛である。愛は己、卽ち自己を、その第二の自己たるべき他に移すことである。愛なる神は、同じ神性ある第二の自己に、自らを移すのである。然れば第二の自己が神でなければ、その愛の移轉は完全なりと言ふことは出來ない。而して玆に第三の自己ありて其中保となり、兩者の間を通じなければ、區別ある調和と一致を保つことが出來ない。サルトリユース曰く、『神は愛である。個人的なる第一の愛である。然れば彼に於ては「我心に適ふわが愛子なり」(マタイ傳三・一七)と宣給ふより大なる歡喜はなからう。神は永遠の子を透して永遠の父である。この兩者は永遠に愛するもの、永遠に愛せらるゝものである。基督は言つた、『父よ、汝の我に賜ひしものゝ、我がをるところに、我と偕に在て、我が榮すなはち汝が我に賜ひしものを見んことを願ふ。そは世基を置かざりし先きに、汝われを

愛したればなり』(ヨハネ傳一七・二四)と。基督は御自分の父に對して御自分を永遠の我といひ、また父を永遠の汝と言ひたまふたのである。我らは子を生むの愛と、子を祝するの愛とを區別せねばならぬ。祝して之に答ふる愛の氣は靈である。然れども唯だ愛が氣であるのみで、有心者でなかつたならば、靈を透して父と子とを崇むることは、自ら尊大になることを免れない。父と子を崇むる靈が有心者であるならば、自ら尊大になる要素は刪除さるるのである』云々。

以上の説明も十分であるといふことは出來ない。けれども之に因りて幾分か、神の本質が明白になつたと思ふ。

單一なる一神教は到底人類の至情に滿足を與へることは出來ない。是は既往の歷史に照してみても、一身上の經驗に徵して見ても明かである。スコツトランドの有名なる神學者フリントは、單一なる一神教の人の宗教心に滿足を與ふることの出來ない點を論じて左の如く言つた、『無神教や、多神教や、凡神教は、つねに單一なる一神教よりも勢力がある。これらの宗教は凡ての人類に對し、一神教よりも流行しやすきものであつて、感化力が强

い。一神教がこれらの大敵に對して常に勝利の位地にあるは、默示によつて神の思想と連結することがあるからだ。何れの國、何れの社會にありても、單一なる一神教は、少數者の外これを信ずるものはない』と。一神教は印度や、希臘や、羅馬に於ても、小數の哲學者の外これを信じなかつた。イスラエル人は一神教であつた。故に屢次多神教の誘惑に陷つたのである。近世、單一の一神教を起さんと企てたものは、英國の『デイスト』であつた。然も英國十八世紀の歴史は、その希望の空しかりしを證明するのである、

近時、一神教をもつて宗教を興さんとするは、諸種のユニテリアンである。然しながら一神教にてその目的を達することを得るか、甚だ疑はしいのである。ドイツに於ける自由派の基督教會は、その教勢振はず、その信仰に活氣を缺くる所あるに由り、他の教派に倣ひ、務めて外國傳道の事業を企つることをしたが、果して之に因りて活氣ある信仰を維持することを得るか、將來に係はる一疑問となさざるを得ない。英國のユニテリアン派は、有名なる『ロベルト・エルスミール』の作者なるウオルド夫人の主唱に從ひ、博愛慈善の事業によつて其信仰を維持せんと勉めたのである。然りながら其冷淡なる一神教の信仰は

たとひ幾分か基督教の感化を受けて居るにしても、永久にその信仰を保持し得るかは大なる疑問とせざるを得ない。教會の過去一百年の歴史は、一神教が多數の人の宗教心に滿足を與へなかつたことを的確に證明してをるのである。英米二國のユニテリアン教會の境遇は、頗る多幸であつたにも係らず、他の教派に比して其教勢遲々として振起せざるは、果して何に原因するのであるか、之はユニテリアンに大なる缺陷があつたからだと言はざるを得ない。一神教は到底人の宗教的至情に滿足を與へるものでない。

古來、單一なる一神教にして大いに勢力を恣にしたるは、モハメツド教の歴史の外、他に之を見ることは出來ない。モハメツド教が一神教として大なる勢力を有することは疑ふべき餘地もない。而して此宗教が斯る勢力を有するに至つたのは多くの原因がありはするが、人間最大の情慾である色情を恣にすることを許したのが、その大なる勢力をえた原因と言ふべきである。モハメツド教の弱點は此にあると同時に、その强點もまた此にある。モハメツドの神は單一の神である。故にその信仰は宿命的に陷るのである。而して宿命的の信仰を有するが故に、彼ら信徒は勇敢となるのである。是も亦モハメツド教の長所にし

て短所といはなければならぬ。宿命說は自由と並立することを得ない。また足なみが進步的となることを得ない。宿命主義は未開野蠻の國に於ては或は必要であるかも知らぬ。けれども到底日進の文化とは並立することは出來ない。斯の如く、單一なる一神敎の結果はつひに宿命主義に陷らざるを得ない。

父なる神の觀念の宗敎的生活に必要なるは、今更ら之を詳論するまでもないので、此父なる神の存在を信じてこそ此世界も始めて明るくなるのである。我らが此世界を住家となすのも、人類を同胞兄弟となすのも、唯父なる神の觀念があるから生じて來るのである。一羽の雀も、天の父の許しなくば、地に墮ちることはできない。斯の如く神は人類を保護したまふのである。故に我らは此地上に在つて安らかに且つ平和に生活するのである。然れば神を畏るべきもの、近づく可らざるもの、高大無邊なるもの、不可思議なるものとするだけでは、安心なる平和なる生活はできない。神は人類を愛護する父であるとの觀念が起らねば、信仰は全たしと言ふことは出來ない。

我らは亦、父なる神の外に、子なる神の存在することを信する必要を生ずるのである。

苟も宗敎的の觀念あるものは、唯だ哲學的の神でなく、父なる神の存在を認むる信仰が必要になつて來るのであるが、神に對する信仰の必要は認めても、子なる神に對する信仰の必要を認めないものがあるのだ。是は宗敎歷史に明かならざるより起こる誤謬であるが、又一は自己の宗敎的經驗に乏しきことに基因する結果と言はなければならぬ。我らは己が罪惡を思ふと、至聖至善なる神に近づくことは出來ない。また荏弱なる我らは、最高き處に在ます神に接近することは出來ない。玆に於てか罪人なる我ら人類には、神の子を信ずる信仰が必要になつて來るのである。神、人となりて世に降り、その神の子が、神と人との仲保となりて、此の兩者の間をとりなし給ふに依りて、我らは憚らずして至聖至善なる神に近づくことを得るのである。肉體を取りて世に降り給ふたる神の子は、我らの荏弱なる狀態を深く躬恤りたまふのである。是に因つて罪ある我らも憚らずして神の御前に出づることを得、そして一切の罪を告白し懺悔して、父なる神と和らぐに至るのである。然れば子なる神基督の存在は、我らの信仰に滿足を與ふるのである。世には父なる神の觀念だけにて十分なりと言ふものがあるけれども、是らは宗敎的經驗を經ざる人の妄言といはざ

るを得ない。苟も正當なる宗教上の經驗あるものは、理論上は兎に角、信仰の實驗よりして、子たる神の存在を確く信ずるのである。

昔、イスラエルの民族は屢次偶像教に誘惑された。斯の如く、偶像教は世界において勢力を占めてゐたのである。偶像教の盛んなるは人の心に人間的の神を要求する至情のあることを、實際的に證明するものである。人は單一なる一神教では滿足するものでない。偶像教の不合理なるは何人も之を知つて居る。けれども尙ほ偶像教を信ずる傾向のあるのは單純の神では人の宗教心を滿足さすことが出來ないからだ。神、人と成りて世に降り、神と人との仲保となり給ふたのは、人の宗教心を滿足さすものであつて、偶像教に於ても尙ほ滿足することの出來ない、宗教的の要求を充すものである。偶像教の勢力を占むる原因は種々あらうけれど、其大なる原因は、近づく可らざる、畏るべき神を變じて人の如きものとなし、且親しむべきものとなすに在りと言はなければならぬ。基督に於ける我々の信仰は、その必要をより以上に充すのである。子なる神は、我々の近づき又親しむことのできる神である。我々は宇宙の大主宰たる神には、モーセの如く、畏れ戰きて親しむことは

出來ない。けれども子たる神に對しては、我らの朋友として、兄弟として、同類として、親しむことが出來るのである。さうして如何なる胸中の秘事をも、子なる神に對しては告白しうるのである。然れば子たる神に對する信仰は、罪人なる我々にとつて缺く可らざる條件と言はねばならぬ。

聖靈なる神に對する信仰は我らの基督教的生活に缺くべからざる信條である。我らの神に對する信仰はとかく超越的に流るゝ弊がある。然しながら唯だ聖靈なる神に對する信仰あつてこそ、神の遍在なることを明瞭に認識することを得るのである、パウロが、『我らは彼に賴りて生き、また動き、また存ることを得るなり』と言つたのは、此の聖靈存在の眞理を指示したものである。我らは神を見ることはできない。神の聲を聞くことはできない。けれども神は常に我らを觀、また我らに語りたまふのである。我らは神のうちに住むのみならず、聖靈の神もまた我らの心に住みたまふのである。我らは神の宮殿である。而して神の靈我らの心に在すのである。此信仰あるが故に我らの心は淸淨なることを得るのである。神を信じても、我心のうちに神在まし給ふことを信じなければ、眞の慰樂を獲る

ことは出來ない。又我らが基督を信ずるといつても、彼が聖靈と倶に我らの心に來つて、我らの心に宿り給ふことを信ずるのでなくば、基督我に在りといふ實感をもつことは出來ない。基督は聖靈について左の如く言つた、『彼れ來らんとき、罪につき、義しきにつき、審判につき、世をして罪ありと悟らせん』と。亦曰く、『彼れ卽ち眞理の聖靈の來らんとき汝らを導きて凡ての眞理を知らしむべし』と。斯の如く我らが宗教上の眞理を確知するも、罪の感覺を得るも、これみな聖靈の作用に因るのである。我らは之を一身上の信仰の實驗によつて眞に然るを知るのである。

三位一體の教理は、一面において神に關する我らの觀念を充實するのみならず、亦一面において基督教の活氣を維持するに缺く可らざる要素であることを知るのである。我國の教會においては往々この教理を輕んじ、殆ど此教理を信徒の生活に關係なきものゝ如く視做す傾向がないでもないが、是は大なる錯誤とせなければならぬ。古今何れの教會においても此教理を放擲して顧みなかつたものに、活潑の信仰を維持したる例しはない。之を以て觀るも、此教理が我らの實際的の信仰に對して如何に必要であるかを確證するものであ

る。古代の師父たちは此教理の解說に最も多くの力を用ゐたのであつた。そして近世の神學者らは等しくこの解說によつて、神に對する深遠なる觀念を獲得せんとしたのであつた。茲に於てか此教理は理論的にも詳密なる攻究を要することを知るのである。

予は、以上の考察において、三位一體の教理を、決して充分に說き盡したとは思はない。然しこれらの考究によつて幾分なりとも此教理を闡明したることを得たとせば、望外の光榮である。

あゝ神の智と識の富は深いかな。其審判は測り難く、其踪跡は索ね難し。孰か主の心を知りし、孰が彼と共に議ることを爲しや。孰か先づかれに施へて其報ひを受けしや、それは萬物は彼より出で、かれに倚り、かれに歸ればなり。願くは世々榮れ神にあれ。

アメン

日本傳道五十年を振返りて、左に揚ぐる人々が、各自にその創業の歴史を綴りたるが此書の内容である。宛として**日本の使徒行傳の觀がある。**亦た日本傳道の側面史とも言へる。此書は後進の我らに刺戟と激勵を與ふるものである。

日本傳道 めぐみのあと

定價一圓・送料十錢

執筆者

小崎弘道　山鹿旗之進
植村正久　田村直臣
平岩愃保　井深梶之助
山本秀煌　ジョン・バチラー
瀬川浅　稲垣信
名出保太郎　土屋彦六
ジョン・シー・ベリー
綱島佳吉
エ・デー・ゴルドン
三浦徹
海老名彈正

昭和九年二月十二日印刷
昭和九年二月十五日發行

「三位一體」の奥付

定價拾錢

著作者　小崎弘道
發行者　東京市豐島區池袋五ノ二三八　卜部義太郎
印刷者　東京市豐島區堀之内町三　小鹽眞三
印刷所　東京市豐島區堀之内町三　第一印刷株式會社

不許複製

發行所　東京市豐島區池袋五ノ二三八
アルパ社書店
振替 東京 六六一四八

植村正久著
信仰の生活（第七版）定價五十錢送料六錢

ト部幾太郎編
祈の聽かれし物語（第八版）定價五十錢送料六錢

植村正久推薦　熊野義孝著
基督に生きる人々（第四版）定價五十錢送料六錢

外村義郎著
信仰問答（第五版）定價十五錢送料二錢

外村義郎著
神を求むる人々へ（第九版）定價二十錢送料四錢

デー・エル・ムーデー説教
神の愛（第五版）定價五錢送料二錢

發行所　東京市豐島區池袋五ノ二三八
アルパ社書店
振替東京六六一四八

終